

研究成果報告書

1. 研究概要

本実証研究では、教職員支援と保護者支援それぞれを、オンラインと対面を組み合わせながら実施し、それぞれで得られた知見を結びつけながら効果的な相談支援体制を構築する。教職員支援については、個別相談(教職員側からの申し出を前提とするもの)と「先生向けギフテッド相談会」(アウトリーチ型)の両者を実施しつつ、情報の匿名化を行った上で教職員向けのウェブサイトに積極的に知見を還元し、情報の普及につとめる。保護者支援については、随時相談が行えるように当事者によるピアサポートを中心とした相談支援を実施する。教職員・保護者ともより個別的な焦点化された支援を必要とする場合は、専門家によるケース会議形式の支援も実施する。

また、これらの事業は精神科医と特別支援教育の専門家が積極的に関わり、十分な質の担保を行いながら実施されるものである。

2. 研究内容

■教職員支援

- 1 教職員向け個別相談・ケース会議
- 2 教職員向け勉強会
- 3 当団体が運営する教職員向けウェブサイト「EDUPEDIA」での情報発信

■保護者支援

- 1 オンラインチャットサービスによる相談受付
- 2 「はじめての親の会」の実施
- 3 「継続親の会」の実施
- 4 子どもの様子に関する保護者へのフィードバック
- 5 専門家によるレクチャー動画の作成

(1) 相談支援の体制

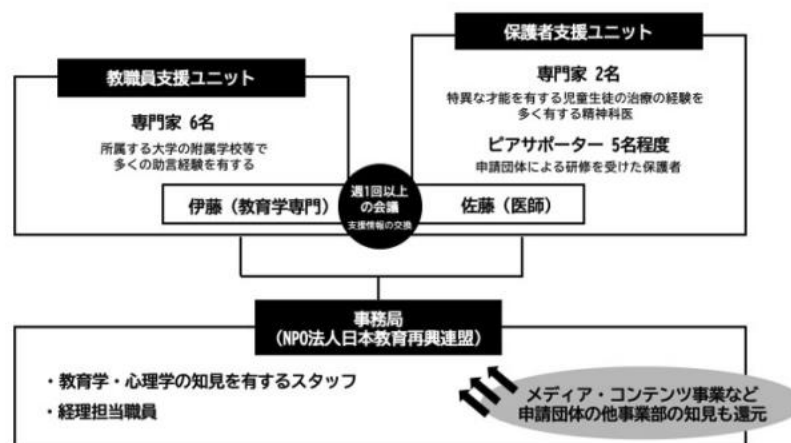


図1 相談支援体制

相談支援体制は、図1の通り構築した。

まず事務局を申請団体が担い、事務局には教育学・心理学に知見を有するスタッフを複数名配置し、さらに団体スタッフが他事業部での知見などを積極的に還元していた。事務局スタッフは単に事務処理をするだけでなく、自身の有する知見を活用し、保護者や教職員からの意見を踏まえた事業の改善検討、団体ホームページにおける告知や実施報告等の情報提供を速やかに行った。また、資金の適切な運用のため、団体経理職員および経理担当理事が事務局業務の一部を担

った。

相談支援にあたっては、教職員支援ユニットと保護者支援ユニットを設置し、専門家（非常勤）を配置した。なお、両ユニットの知見を結びつけ、効果的な支援を行うため、両ユニットに医師免許を有する佐藤と博士（人間科学）および教員免許（小中高特別支援）を有する伊藤を配置し、両者は週1回以上の会議を設け、支援情報の交換を行った。

表2 専門家メンバー

氏名	所属・専門	役割
伊藤駿	京都教育大学専任講師、NPO 法人日本教育再興連盟（申請団体）理事。博士（人間科学）。専門は特別支援教育、特異な才能のある児童生徒を含むインクルーシブ教育、比較教育学。	【教職員支援ユニット・保護者支援ユニット】 専門家間のコーディネーター、特に特別支援教育およびインクルーシブ教育の観点からの相談対応。
佐藤駿一	東京大学医学部附属病院医師、どんぐり発達クリニック非常勤医師。NPO 法人日本教育再興連盟（申請団体）スタッフ。精神科医。どんぐり発達クリニックで多くの特異な才能を有する児童生徒への診療にあたっている。	【教職員支援ユニット・保護者支援ユニット】 専門家間のコーディネーター、医学および心理学の観点からの相談対応。
石田祥代	千葉大学教授。博士（心身障害学）。専門はインクルーシブ教育、比較教育学、障害児教育。科研費課題「インクルーシブ教育理論から優秀児の教育的支援を展望する萌芽的研究」に取り組んでいる。	【教職員支援ユニット】 特別支援教育、障害児教育の観点から教職員への助言を行う。
中道圭人	千葉大学教授。博士（教育学）。専門は幼児教育、発達心理学。ワーキングメモリー等に注目した子どもの発達に関する業績を有する。また、上記の石田氏による科研費課題の研究分担者でもある。	【教職員支援ユニット】 発達心理学の観点から教職員への助言を行う。
是永かな子	高知大学教授。博士（教育学）。専門は比較教育学、障害児教育。上記の石田氏による科研費課題の研究分担者であり、特に成人した特異な才能を有する若者への調査経験を豊富に有する。	【教職員支援ユニット】 教育学、障害児教育の観点から教職員への助言を行う。
Divya Jindal-Snape	英国ダンディー大学（University of Dundee）教授。博士（心身障害学）。特別な教育的ニーズを有する子どもたちのトランジション（移行）を専門とする。	【教職員支援ユニット】 国外事例をもとに本事業へのアドバイスを行う。
Margaret Sutherland	グラスゴー大学（University of Glasgow）教授。博士（学校教育学）。特異な才能のある子どもおよび成人への教育を専門とする。	【教職員支援ユニット】 国外事例をもとに本事業へのアドバイスを行う。
田尻智哉	岡本台病院精神科医師。発達障害や特異な才能を有する児童生徒の診療に多くあたっている。	【保護者支援ユニット】 医学の観点から保護者の相談に対応する。
宮尾益	どんぐり発達クリニック院長。医学博士。特異な才能のあ	【保護者支援ユニット】

知	る傾向のある児童生徒の診療を行っている。また関連著書多数。	多くの症例をもとに医学の観点から事業へのアドバイスを行う。
---	-------------------------------	-------------------------------

教職員支援ユニットには、自身の所属する大学の附属学校等で多くの助言経験を有する、石田祥代（千葉大学教授）、中道圭人（千葉大学教授）、是永かな子（高知大学教授）を招き、就任いただいた。特に石田教授は現在特異な才能を有する児童生徒に関する研究について科研費を獲得したり、発達障害学会学会誌で同様のテーマの特集を組んだりするなど多くの知見を有することから、ユニット統括としての役割を担っていただき、事業開始の際に多くの助言をいただいた。さらに、教職員支援に関して、英国ダンディー大学（University of Dundee）の Divya Jindal-Snape 教授、グラスゴー大学（University of Glasgow）の Margaret Sutherland 教授にも伊藤が訪英した際にアドバイスをいただいた。両名とも特異な才能を有する子どもたちを含んだインクルーシブ教育の専門家であり、特に Sutherland 教授はスコットランドにおいて特異な才能を有する子どもたちの支援ネットワークである「The Scottish Network for Able Pupils」の代表を務めている。

保護者支援ユニットは保護者自身だけでなく、子どもに関する相談が多く寄せられることが予想される。そこで、特異な才能を有する児童生徒の治療の経験を多く有する精神科医の佐藤駿一（東京大学・どんぐり発達クリニック非常勤医師）が保護者への相談支援において中心的役割を担っている。また、専門的な心理カウンセリングなどではなく保護者同士による意見交換、すなわちピアサポートが求められているケースが多く見られるため、より専門的な支援は先の専門家スタッフが対応しつつも、即時的な対応が求められたり、様々なケースを聞きたいといったりするニーズに回答できるよう、ピアサポートの仕組みも支援体制に組み込んだ。このピアサポート体制は、すでに申請団体とつながっていたおよそ 250 家庭の中から立候補によって 2024 年度に選出した 4 名に、前年度から継続の依頼をして就任いただいた。さらに、これらの専門家スタッフ、ピアサポーターに対するアドバイザーとして、宮尾益知氏（どんぐり発達クリニック院長）に定期的な助言をいただける体制で本事業を実施した。

（２）取組内容

<経過>

■教職員支援

1. 教職員向け個別相談・ケース会議

相談内容を踏まえ、特に支援が必要な場合には、学校を訪問してケース会議を実施した。

月	取組内容
4 月	
5 月	24 日 1 件（メール）
6 月	11 日、12 日名古屋市立猪子石小学校ケース会議実施。17 日 1 件（オンライン）、24 日 京都府舞鶴市 教職員向け研修会・ケース会議
7 月	
8 月	6 日 1 件（オンライン）
9 月	18 日 舞鶴市立由良川小学校 ケース会議
10 月	22 日 京都市立衣笠中学校 ケース会議 28 日 京田辺市立三山木小学校 ケース会議
11 月	
12 月	
1 月	24 日 舞鶴市立由良川小学校 ケース会議

2月	1日 1件（オンライン）
3月	

2. 教職員向け勉強会

月	取組内容・参加者数
4月	27日（土）入門編～特定分野に特異な才能のある児童生徒の特徴と学校現場でできる支援～ 12人
5月	11日（土）学校で支援が必要な特異な才能児（ギフテッドを含む）と学校がそれぞれ抱える困難 16人
6月	16日（日）日本における特異な才能のある児童生徒の理解と支援の事例 13人
7月	20日（土）特異な才能とワーキングメモリ 17人
8月	3日（土）アメリカのギフテッド教育①～認定と評価の基準～ 5人 31日（土）特異な才能のある子のこころの発達をどう支援するか 18人
9月	15日（日）特異な才能のある子どもへの合理的配慮 11人 28日（土）事例からみる WISC の読み方と考え方 10人
10月	13日（日）北欧の「ギフテッド」教育 ～教室で行われている工夫～7人
11月	17日（日）アメリカのギフテッド教育②～ギフテッドプログラムの特徴～15人
12月	6日（金）ギフテッドを『診立てる』臨床的意義 50人
1月	29日（水）子ども支援に向けた保護者との連携～愛着とメンタライゼーションの観点から～ 11人
2月	実施なし
3月	実施なし

3. 「EDUPEDIA」での情報発信

個別相談の内容を匿名化したものや、事業に関わる専門家へのインタビューをもとに、2024年度内に3本の記事を公開した。

10月公開：「特異な才能」と学校④ 保健室登校の子どもへの対応

2月公開：【石田祥代先生インタビュー】「特異な才能」と学校⑤～ギフテッド研究の第一人者に聞く～

■保護者支援

1. オンラインチャットサービスによる相談受付
年間を通して常時設置していた。

2. 「はじめての親の会」の実施

実施日	参加人数
4月14日（日）	19人
5月11日（土）	14人
6月16日（日）	16人
7月27日（土）	11人
8月3日（土）	10人

9月15日（日）	16人
10月13日（日）	18人
11月16日（土）	21人
12月1日（日）	11人
1月12日（日）	19人
2月24日（月）	今後実施

3. 「継続親の会」の実施

実施日	取組内容	参加人数
4月14日（日）	「子ども・思春期のメンタルヘルス」勉強会	54人
5月11日（土）	「教育虐待」＋保護者同士交流会	33人
6月16日（日）	「特定分野に特異な才能のある児童生徒への推進事業1年目の成果を読み解く」勉強会	35人
7月27日（土）	「通知表の評価」＋保護者同士交流会	30人
8月3日（土）	当事者大学院生と当事者高校生による座談会	43人
9月28日（土）	「データから見る不登校」＋保護者同士交流会	50人
10月13日（日）	「バウンダリーについて vol.1」勉強会	38人
11月17日（日）	「バウンダリーについて vol.2」勉強会	75人
12月1日（日）	「ギフトド・2E学会設立イベント」視聴	70人
1月26日（日）	「完璧主義について」＋保護者同士交流会	54人
2月2日（日）	当事者大学生と中学教員による対談	65人
3月30日（日）	本事業振り返り（伊藤・佐藤による対談）	今後実施

4. 子どもの様子に関する保護者へのフィードバック 年間を通して随時実施していた。

5. 専門家によるレクチャー動画の作成

10月：作成する動画のテーマ選定

12月：撮影業者との打ち合わせ

1月：登壇する専門家との打ち合わせ

2月：撮影

3月：納品予定

<内容>

対象	取組	実施回数	参加者数	相談内容／実施内容
教職員	個別相談	4件 （内、メール相談1件） 3月末まで実施予定	4名	相談内容は下記の通りで、専門家が1対1で相談を受け、対応策のアドバイスを行った。 男子児童・生徒に関する相談が多く、学習面に関する相談もあったが、その相談の中にも生活面の困りに関する相談があった。 <学習面>

				・「高校2～3年の数学が理解できるが、苦手教科（美術）が全く手につかない。その場合の評価の方法や配慮の是非、配慮する場合の基準や指導上明確にしておくことなどを知りたい。」 ・「理科は好きだが、理科の授業が好きではない。ルールなどがあっていやだ。」 <生活面> ・「死んだらどうなるか考えすぎてしまい、怖がる。」 ・「時間感覚が弱く見通しを持って行動できない、ボーッとしやすく忘れ物が多く指示されたことを忘れてしまう。」 ・「保健室と教室を行ったり来たりしている。」																
教職員	ケース会議	6 件		前年度は個人情報の観点から実施のハードルがあり、実施できなかったが、教職員側からの強い要望もあり、保護者と学校双方に丁寧に許諾を取ることで実現させることができた。																
	相談会・勉強会	12 回	のべ 178 名	専門家登壇 教職員向け勉強会 2024年度年間予定表 ご関心に合わせて、何度でもご参加ください。 各回終了後30分、任意参加で交流会も開催します。 <table><thead><tr><th>4月</th><th>5月</th><th>6月</th><th>7月</th></tr></thead><tbody><tr><td>27(土)16:30-17:30 入門編 ～特定分野に特異な才能のある児童生徒の特徴と学校現場でできる支援～ 児童精神科医 佐藤隆一 京都教育大学講師 伊藤 隆</td><td>11(土)14:00-15:00 学校で支援が必要な特異な才能児（ギフテッドを含む）と学校がそれぞれ抱える困難 千葉大学教授 石田祥代 京都教育大学講師 伊藤 隆</td><td>16(日)9:00-10:00 日本における特異な才能のある児童生徒の理解と支援の事例 高知大学教授 星永かな子</td><td>20(土)14:00-15:00 特異な才能とワーキングメモリ 千葉大学教授 中道圭人</td></tr><tr><td>3日(土)14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育①～認定と評価の基準～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 関内健一 31日(土)15:00-16:00 特異な才能のある子どものこころの発達をどう支援するか 児童精神科医 宮崎昭知</td><td>15(日)10:00-11:00 特異な才能のある子どもへの合理的配慮 北海道教育大学教授 片桐正樹 28日(土)10:00-11:00 事例からみるWISCの読み方と考え方 児童精神科医 佐藤隆一</td><td>19(日)9:00-10:00 北欧の「ギフテッド」教育～教室で行われている工夫～ 高知大学教授 星永かな子</td><td>17(日)14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育②～ギフテッドプログラムの特徴～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 関内健一</td></tr><tr><td>6日(金)16:30-17:30 ギフテッドを「診立てる」臨床的意義 JCHO船橋中央病院小児科医・千葉大学客員教授 杉田 篤生</td><td>29日(木)16:00-17:00 子ども支援に向けた保護者との連携～支援とメンタライゼーションの観点から～ 京都教育大学講師 神原久直</td><td>お申込み・詳細 各回1か月半前頃から申込受付を開始いたします  https://openhouse.jp/spring-teacher/</td><td>主催 NPO法人日本教育再開連盟 (ROJE)  本事業は、文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の一環として実施いたします。</td></tr></tbody></table> 過去に参加した人も、さらに学びを深め、現場での実践に活かしていただけるよう、2024年度は月替わりで多様な専門家を招いて勉強会を開催した。 医師と教育の専門家総勢 10 名に協力をいただき、あらゆる角度から特異な才能のある児童生徒を支えていくための知識を提供することができた。	4月	5月	6月	7月	27(土)16:30-17:30 入門編 ～特定分野に特異な才能のある児童生徒の特徴と学校現場でできる支援～ 児童精神科医 佐藤隆一 京都教育大学講師 伊藤 隆	11(土)14:00-15:00 学校で支援が必要な特異な才能児（ギフテッドを含む）と学校がそれぞれ抱える困難 千葉大学教授 石田祥代 京都教育大学講師 伊藤 隆	16(日)9:00-10:00 日本における特異な才能のある児童生徒の理解と支援の事例 高知大学教授 星永かな子	20(土)14:00-15:00 特異な才能とワーキングメモリ 千葉大学教授 中道圭人	3日(土)14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育①～認定と評価の基準～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 関内健一 31日(土)15:00-16:00 特異な才能のある子どものこころの発達をどう支援するか 児童精神科医 宮崎昭知	15(日)10:00-11:00 特異な才能のある子どもへの合理的配慮 北海道教育大学教授 片桐正樹 28日(土)10:00-11:00 事例からみるWISCの読み方と考え方 児童精神科医 佐藤隆一	19(日)9:00-10:00 北欧の「ギフテッド」教育～教室で行われている工夫～ 高知大学教授 星永かな子	17(日)14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育②～ギフテッドプログラムの特徴～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 関内健一	6日(金)16:30-17:30 ギフテッドを「診立てる」臨床的意義 JCHO船橋中央病院小児科医・千葉大学客員教授 杉田 篤生	29日(木)16:00-17:00 子ども支援に向けた保護者との連携～支援とメンタライゼーションの観点から～ 京都教育大学講師 神原久直	お申込み・詳細 各回1か月半前頃から申込受付を開始いたします  https://openhouse.jp/spring-teacher/	主催 NPO法人日本教育再開連盟 (ROJE)  本事業は、文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の一環として実施いたします。
4月	5月	6月	7月																	
27(土)16:30-17:30 入門編 ～特定分野に特異な才能のある児童生徒の特徴と学校現場でできる支援～ 児童精神科医 佐藤隆一 京都教育大学講師 伊藤 隆	11(土)14:00-15:00 学校で支援が必要な特異な才能児（ギフテッドを含む）と学校がそれぞれ抱える困難 千葉大学教授 石田祥代 京都教育大学講師 伊藤 隆	16(日)9:00-10:00 日本における特異な才能のある児童生徒の理解と支援の事例 高知大学教授 星永かな子	20(土)14:00-15:00 特異な才能とワーキングメモリ 千葉大学教授 中道圭人																	
3日(土)14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育①～認定と評価の基準～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 関内健一 31日(土)15:00-16:00 特異な才能のある子どものこころの発達をどう支援するか 児童精神科医 宮崎昭知	15(日)10:00-11:00 特異な才能のある子どもへの合理的配慮 北海道教育大学教授 片桐正樹 28日(土)10:00-11:00 事例からみるWISCの読み方と考え方 児童精神科医 佐藤隆一	19(日)9:00-10:00 北欧の「ギフテッド」教育～教室で行われている工夫～ 高知大学教授 星永かな子	17(日)14:00-15:00 アメリカのギフテッド教育②～ギフテッドプログラムの特徴～ 昭和女子大学現代教育研究所研究員 関内健一																	
6日(金)16:30-17:30 ギフテッドを「診立てる」臨床的意義 JCHO船橋中央病院小児科医・千葉大学客員教授 杉田 篤生	29日(木)16:00-17:00 子ども支援に向けた保護者との連携～支援とメンタライゼーションの観点から～ 京都教育大学講師 神原久直	お申込み・詳細 各回1か月半前頃から申込受付を開始いたします  https://openhouse.jp/spring-teacher/	主催 NPO法人日本教育再開連盟 (ROJE)  本事業は、文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」の一環として実施いたします。																	
	EDUPEDIA	3 記事		当団体が運営する教員向け WEB サイトに、教員向け個別相談を担当する専門家へのインタビュー記事を掲載。特異な才能のある児童生徒への対応について、教員に伝えたいことを聞き取りまとめた。 また、個別相談の内容を匿名化した記事も 2 記事公開した。																
保護者	オンラインチャット	常時	210 名 (2025/2/13 時点)	トークルームを「自己紹介」「雑談」「質問」「情報共有」の 4 つに分けて運営しており、それぞれピアサポーターを中心に、保護者同士のコミュニケーションが行われている。育児の悩みを吐露した投稿に対し、共感やアドバイスが寄せられる流れが基本で、温かく前向きな雰囲気があると感じる。保護者同士のコミュニケーションを大事にし																

				ているが、専門家も複数名参加しているため、必要に応じてコメントを入れるケースもあった。 【チャット上でやりとりされていたテーマの一例】 ・不登校の子どもの日中の過ごし方について ・夫とのやり取り、子育て方針のずれの違いの悩み ・中学受験など進路について ・子どもの無気力への寄り添い方 ・様々な体験談のシェア（習い事、フリースクール、課外体験、転校など） ・母子分離不安、偏食、などとの向き合い方について ・学校との連携、子どもの特性をどう伝えるかについて等
	はじめての親の会	10 回 (年度内+2 回予定)	155 名 (1 月開催分まで)	月に 1 回、毎回以下の内容で開催し、募集開始直後に定員 20 名がすぐに埋まる状況が続いていた。 ①専門家レクチャー ・伊藤駿（京都教育大学講師（専門：特別支援教育）） ・佐藤駿一（児童精神科医） の 2 名が、教育・医療のそれぞれ面から特定分野に特異な才能のある児童生徒の特性や支援などについてレクチャーを実施。 ②保護者さま同士の交流会 参加者の方々同士でお悩みなどを共有し合っていたく時間。
	保護者への子どもの様子のフィードバック	随時		月に 1 回オンラインで開放している子どもの居場所を無料で開放し、参加した子どもの様子で特筆すべき点があれば保護者にフィードバックした。 また、保護者向けのオンラインチャットに日頃子どもと関わっている大学生スタッフが参加し、子どもとの会話の一幕などを投稿するなどして、子どもの様子を伝える取組も行った。
	継続親の会	11 回 (年度内+1 回予定)	のべ 547 名	専門家による勉強会、当事者による体験談、保護者同士によるグループワークをローテーションしながら、月に 1 回開催した。 勉強会は、伊藤や佐藤からのほか、教職員支援ユニットに属する先生方や外部の講師に登壇を依頼しながら、幅広いテーマで実施しており、毎回終了後にはオンラインチャットにてポジティブな感想が多く寄せられている。 毎月参加している保護者も多く、この会の存在が日々の子育てのモチベーションになっているといった声も聞かれた。

<評価>

アンケート等によって直接評価を得ている取組について以下に記載する。

対象	取組	評価概要
教職員	個別相談	【相談直後のアンケートより（回答 5 件）】 <相談者満足度>5 点 / 5 点満点中 <感想（抜粋）> ・ご助言いただいたこともそうですが、先生の相手の意見の引き出し方、話の聞かれ方なども大変参考になりました。

		・ギフテッドやIQの高いASDや特定能力を持つ子供についての情報は今の教職員には必要な情報ですが、特に高偏差値の公立学校に勤める教職員は積極的に知りおきたい大切な情報だと感じました。子供の個性や学校の状況の一つとして同じものが無いため、個別相談は大変ありがたい機会でした。 ・毎回、新しい視点をいただき、本当に勉強になる貴重な時間となっています。ありがとうございました。 <「今後どのような対応をしてみたいか」> ・勉強面：「授業の仕方を工夫する」、「授業中、本人に与える課題を工夫する」、「本人に、学業の取り組んだあとの声かけなどを工夫する」 ・生活面：「本人への指導の仕方を工夫する」、「担任と対応の仕方を共有する」、「家族へのお願いの仕方・伝え方などを工夫する」、「クラスメートに、配慮のための声掛けを行う」 ・友人関係：「本人への指導の仕方を工夫する」、「これまでと対応方法は変わらない（あるいは、これまでもそこまで困っていなかった）」、「クラスメートに、配慮のための声掛けを行う」 ・子どもと教職員との関係性：「本人への声かけの仕方や対処を工夫する」、「他の教職員と情報共有を行う」、「他の教職員に、このように配慮して欲しい、ということを伝える」、「その子の困難感や悩みについて、考えてみる」 【相談から3か月後に取ったアンケートより（回答3件）】 すべての回答者が、子どもの特性を踏まえ、何らかの対応を新たに実施したもしくは検討していると回答していた。 <「一番工夫した対応について、具体的に何をしたら教えてください」> ・単元学習のレディネスに基づいたグルーピングに変更することで、学習レベルが同程度の友達と繋がる工夫をした。 ・養護教諭の力を借り、（保健室に拠点を置いており、昨年からの繋がりがああるため本音を言いやすい相手であるため）本人の本音を教えてもらったり、どのように対応したら良いかアドバイスをもらいながら本人の様子を見守ったこと。相談させていただいた時より、本人の本音を少しずつ聞けるようになってきた。 ・具体的にはまだ議論中ですが、本人の他者からの受け入れられ感をどのように強くしていくか、日記をはじめ普段の対話などから考えています。
	相談会・勉強会	<参加者満足度> 満足度 4.37点 / 5点満点中 （回答118件） <感想抜粋> ・「配慮という名の排除」という言葉が印象に残りました。個別対応が求められやすいのですが、考え方を変えなければと思いました。 ・実際に丁度抱えている課題であるにもかかわらず、学べる場も無い中助けて頂き本当に心強く思っております。 ・子どもへの対応で自分の配慮の足りなさを反省いたしました。勉強会を通して学んだことを今後に活かしたいです。 ・困りごとを抱えている児童生徒に対応するには、当たり前のことを日々確実に積み重ねていくことが必要なのだと改めて感じました。 ・この仕事に携わって10年以上になりますが本当に難しいと感じています。また宜しく申し上げます。 ・日本の学校教育でまだ対応可能な部分があることを示唆していただき、背筋が伸びる思いでした。具体的な考え方や対応の仕方などをご教示頂いたので、早速現場で生かしてゆこうと思います。 ・親や周囲が感じる特異な才能への見方・期待と本人の希望との違いをお話し頂けて、再認識できてよかったです。どうしても保護者の不安や期待を受けて

		動く合理的配慮になりやすいので、本来の本人にとって必要な合理的配慮に立ち返って行けたらと思いました。 ・質問に対して、的確なご提案をしてくださったのでとても勉強になりました。 ・非常に的確にアドバイスをいただき、支援の方向性が見えた気がします。 ・教員として保護者とのような関係を構築していくか、大変重要な視点を教えていただきました。
保護者	オンラインチャット	最近入った人も過去の投稿を全て見られるようになっていたため、同じような悩みを抱えた人がいるんだという気づきに繋がっており、以下のような書き込みが多く見られる。 ・sprinGに参加して初めて、息子だけでなく自分もこれまで孤独だったのかもしれない、と気づきました。 母子ともども、皆様との交流を楽しみにしております。 ・不登校になって以降、勉強の遅れや社会性が育つ場が減ってしまう点が心配でどうやって再登校させたらいいかとしばらく悩んでいましたが、sprinGに入会后、娘ができる〜む（※）でお友達と上手にやり取りしている様子を知り、登校に拘らなくてもいいと少しずつ思えるようになってきたところです。今、娘はできる〜むへの参加をととても楽しみにしていて、他者との関わりが増えていることに安心しています。また、子供たちが近い感覚を持った友達と交流をとれることも嬉しく思っています。ずっと一人で子供の発達について調べたり悩んだりして疲れていたのですが、同じような特性を持つ親御さんと繋がるのができて、少し心が軽くなりました。ありがとうございます。 （※：当団体が運営する子ども向けのオンラインの居場所の名称）
	はじめての親の会	2024年度参加者の満足度：平均 4.2/5 段階 「これまで人に子育ての悩みを話せずにいて孤独を感じていたが、同じような家庭があるのだと知って楽になった」という主旨の感想が多く寄せられた。

3. 相談支援の在り方

本事業では、保護者および教職員の相談支援体制を2年間をかけて構築し、今年度も3名の事務局スタッフおよび8名の専門家を非常勤ではあるが配置してきた。また、教職員向け勉強会では上記の専門家以外の専門家の力も借りながら、事業を展開した。事務局スタッフも、2年目ということで事業の見通しを持ちながら業務にあたることができたため、3名程度のスタッフで十分に対応できていたと考えられる。ただし、特に保護者向けの相談事業では、毎月20名程度の定員が毎回満員御礼状態であったことを踏まえると、ニーズに合わせてより多くの家庭を受け入れるのであれば、それに伴った人員の補強が必要であると考えられる。

また、専門家についても、各自の専門性を活かしつつ、多様なディシプリンをもつ専門家同士が協働することで、受益者の満足度も向上させることができたと考えている。さらに、本事業では専門家同士のネットワーク構築も行った。その結果として、教員向けの勉強会で、他の専門家の勉強会に参加するなど、双方の知見や専門性の交換を行う様子もみられた。中には、各専門家が別の機会研修を行う際に、他の専門家の勉強会の内容を取り入れるなど、専門家自身の専門性向上に向けた取り組みを実施できたことは、本事業を大きな成果の一つであると考えている。これらのことを踏まえつつ、相談支援業務の企画・運営に必要な専門家の専門性について考えると、自らの取り扱える領域をしっかりと認識した上で相談に乗るということ、さらには他領域については必要に応じて他の専門家の力を借りるという協働性とも呼べる専門性が必要であると言えるだろう。もちろん、各自のもつ専門性や依拠するディシプリンなどに軸足をおいて相談に乗ることも重要なことであることは間違いない。

続いて、相談支援スタッフと専門家の連携体制についてである。この点において、受託団体の何よりもの特徴は団体内に事務局スタッフおよび高い専門性をもつ人材がいることであり、はじ

めから協働体制が醸成されてきたことは事業を円滑に実施する上で大きな助けになったことは間違いない。また、団体内部に専門家がいることは、外部の専門家の力を借りる上でも、こういった専門性をもっているのか、ディシプリンはどういったところにあるのか、所属学会等から見える特徴など、依頼時に気をつけるべき点を速やかに事務局にフィードバックできるため、大きな力となったと考えている。専門家と事務局の連携体制として、単に密に連絡を取るということや、専門性を理解して速やかにマッチングするということは当然として、専門家側が受託団体の状況や、事務局員のパーソナリティも含めて理解していたことは、事業を円滑に実施すること、さらにクライアントに対して一貫した対応を行うという点においても重要であった。なお、受託団体は国内外の研究者と本事業以外でも協働をしており、事務局スタッフ自身も専門家への対応方法や気をつけるべき点などを理解しており、団体としてのナレッジが蓄積されていたことも大きかったと感じている。さらに事業部の垣根を越えて専門家等を紹介しあえる関係性があり、結果として、これまで繋がりのなかった専門家とも今年度事業を共に実行できたことも成果の一つである。なお、これで一旦2年間の事業としては終了になるが、検証すべき課題についても3点指摘したい。第一に、学校現場等との協働である。今回の教職員向け勉強会等においても、参加者のほとんどは、学校として参加するというよりも、個人的な問題意識で参加しているという点で、特定分野に特異な才能のある児童生徒を学校全体で支援していくという取り組みにはなかなか発展しなかったと考えている。もちろん、そうした課題意識をもった教員がケース会議等を開催し、結果として学校全体での支援につながっていったというケースはあったが、管理職の参加が少ないなど、学校現場との連携についてはまだ大きな課題であると考えている。第二に、国外事例の収集や共創である。受託団体は、所属する研究者が他の用務により海外出張等に行った際に、特定分野に特異な才能のある児童生徒向けの様々な教育プログラムについて情報収集を行ってきた。やはり日本においては特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援という点では発展途上な部分や制度的な障壁も少なくなく、さらに相談に訪れる保護者や教職員も海外事例に強い関心をもっているケースは多く、そうした点において国外の事例を収集しておくことは非常に重要であると感じられた。グローバル化の進行はかねてより指摘されているところであるが、現在、保護者らの選択肢も国外にまで広がっている。ただし、その選択に潜むリスクなどが十分に理解されているともいえず、信頼のおける情報集約サイト等があることが望ましいと感じられた。第三にアセスメントの観点である。特定分野に特異な才能があるということの定義はあえて厳密にとられていないものと理解している。かつてWebbらはギフテッドというものが発達障害に誤診されている実態などを詳らかにしている(Webb, J. T., Amend, E. R., Beljan, P., Webb, N. E., Kuzujanakis, M., Olenchak, F. R., & Goerss, J. Misdiagnosis and dual diagnoses of gifted children and adults: ADHD, Bipolar, OCD, Asperger's, Depression, and other disorders (2nd Ed.). Great Potential Press, 2016.)が、同時に、発達障害ではなく、ギフテッドや特定分野に特異な才能があると考えて支援をして欲しいという申し出も少なからずあった。受託団体としては、発達障害にせよ、特定分野に特異な才能があるにせよ、さらにそれが重複しているにせよ、個別最適な取り組みが必要であるという点では共通している一方で、その支援方策はそれぞれ異なるため、適切なアセスメントの必要性を強く感じるところであった。この特性をいかにして把握していくのかということも今後取り組むべき課題であることは間違いない。

4. 参考資料

・教員向けWEBサイト EDUPEDIA 掲載記事

【石田祥代先生インタビュー】「特異な才能」と学校⑤～ギフテッド研究の第一人者に聞く～
<https://edupedia.jp/archives/40411>

「特異な才能」と学校④ 保健室登校の子どもへの対応
<https://edupedia.jp/archives/39169>